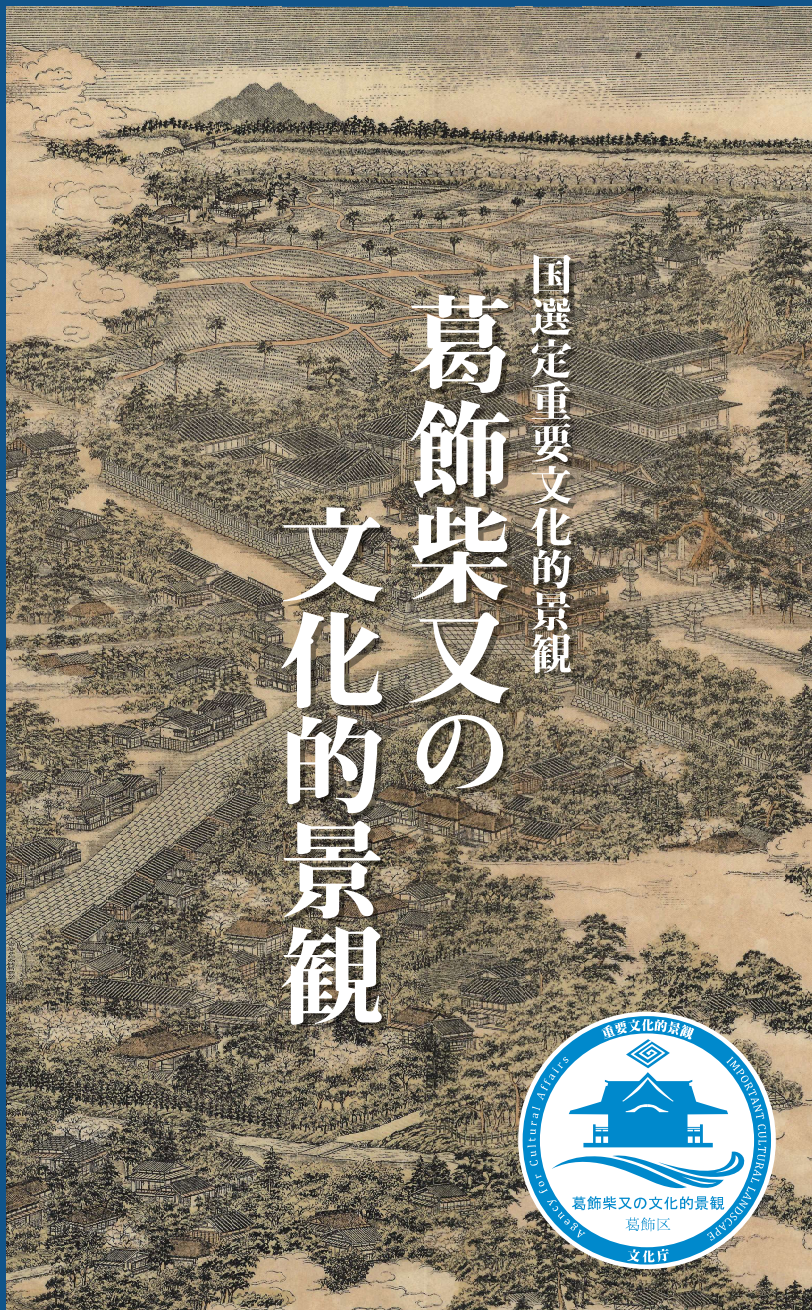




葛飾柴又の文化的景観

国選定重要文化的景観



葛飾柴又の文化的景観

文化的景観とは

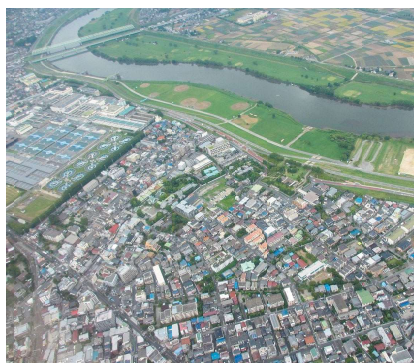
「文化的景観」とは、山間や海辺の農山漁村、あるいは町場の商店街や都市のまち並みなど、風土に根ざして営まれてきた人々の生活や生業のあり方を表す景観地のことを言います。文化的景観は、私たちが自然や風土と共生する中で育んできた原風景とも言えるものです。

「文化的景観」は、平成16年の文化財保護法の改正に伴い、新たな文化財の種類として位置づけられ、特に重要なものを「重要文化的景観」として国が選定する制度が整えられました。文化的景観の保護制度は、魅力ある地域づくりの推進や地域コミュニティの活性化など、地域の誇りを次世代へと継承する制度として期待されています。



葛飾柴又の航空写真(大正末期から昭和初期)

葛飾柴又の文化的景観の価値



柴又地域航空写真(平成20年頃)

〔重要文化的景観選定までの取組〕

映画『男はつらいよ』の主人公「寅さん」の故郷として知られる葛飾区の柴又は、江戸川西岸に位置し、水や緑の豊かさ、柴又八幡神社に代表される歴史の深さ、帝釈天題経寺とその参道の賑わいに加え、地域コミュニティの親密さが魅力で、毎年多くの人が訪れています。

葛飾区では、こうした魅力を引き継ぎつつ新たな価値の創出を目指して、平成23年度から同26年度にかけて葛飾柴又地域の文化的景観の調査を実施し、平成29年に「葛飾柴又の文化的景観保存計画」を策定しました。

葛飾区では、これらの成果に基づき文部科学大臣に重要文化的景観の選定申請を行い、平成30年2月13日に「葛飾柴又の文化的景観」が、東京都では初めて国の重要文化的景観に選定されました。

〔文化的景観の特徴〕

葛飾柴又は、東京低地のなかの微高地で、帝釈天題経寺の存在を核とし周囲の低地を開発しながら、一つの領域として発展してきました。その都市構造と、生業を基盤とした独特の情緒ある景観が継承され、現在も生き続けている点で他に例がありません。またその点が評価されて映画の舞台となり、多くの人々に記憶されています。これらの点からきわめて貴重な景観地として「国重要文化的景観」に選定されました。

「文化的景観」という見方から葛飾柴又をとらえると、「葛飾柴又の文化的景観」の価値は以下の3点にあります。

- ①江戸・東京と房総・北関東という2つの流れが結節する場所としてのノード性(結節点)
- ②都市・農村の両義性
- ③参詣客を意識して変貌してきた建築・空間の流動性

また申請にあたっては、「葛飾柴又の文化的景観」を構成する本質的な価値を示す「重要な構成要素」を特定しています(令和4年現在83件)。「重要な構成要素」の保全と継承に努めることで、文化的景観の価値を維持し、持続的な地域の発展を目指します。



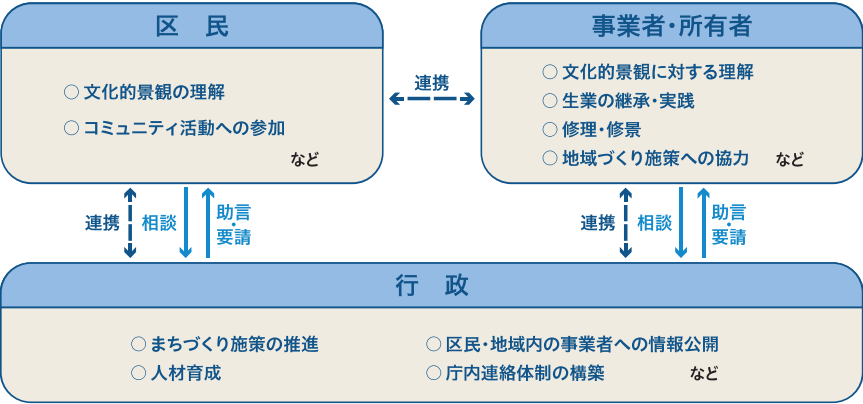
夕暮時の帝釈天参道

葛飾柴又の文化的景観の範囲

「葛飾柴又の文化的景観」は、帝釈天題経寺付近の「第1のリング」とそれを包む「第2のリング」、さらにそれらを取り囲む「第3のリング」という3つの区域(リング)から成り立っています。保存計画においてはこの3つのリングと共に、景観のまとまりごとに7つの景観単位を設けて保存や活用、整備の方針を立てています。また、これらの文化的景観の一体性を担保するものとして、柴又用水(柴又の範囲を規定)、街道と江戸川(広域交通・流通の結節点)、旧家(微高地上にある柴又地域発展の主体)の3要素があげられます。



重要文化的景観を保存・活用していくために



重要文化的景観を保存しながら整備活用を推進するためには、行政が文化的景観を活かしたまちづくり施策を推進するだけではなく、区民や地域内の事業者、重要な構成要素の所有者が文化的景観を理解し、継承していくことが不可欠です。

上記に整理する役割を、地域住民を含めた区民、事業者・所有者、行政がそれぞれ担い、実施主体となることで、文化的景観の整備・活用の推進に努めます。

区民の皆さんへ
文化的景観の継承は、地域住民を始めとする区民自らが
その価値と魅力を磨き高めることが重要となります。
皆さんの地域のコミュニティ活動を始め、まちづくり等の多様な活動を通し、
文化的景観の整備・活用の取組がなくては、
日本を代表する景観地「葛飾柴又」を後世に伝えていくことはできません。

届け出が必要なこと	届け出が必要な事項	届出者	届出時期
重要文化的景観の重要な構成要素においては、文化庁へ右記について届け出が必要です。届け出にあたっては、事前に葛飾区へご相談ください。	滅失又はき損	所有者等	事実を知った日から10日以内
	現状変更又は保存に影響を及ぼす行為	行為をしようとする者	行為をしようとする日の30日前まで

文化的景観の保存・活用に関わる方々は下記までご相談ください。
葛飾区教育委員会生涯学習課 ☎ 03(3695)1111



(発行)葛飾区教育委員会
令和4年11月

(事務局)葛飾区教育委員会生涯学習課
〒124-8555 東京都葛飾区立石5-13-1

地形と歴史



柴又地域地形段彩図

古代・中世

〔微高地と地名〕

葛飾柴又は、海拔3m前後の微高地を中心に発展してきました。この微高地は、東西に伸び、その基盤はかつての海岸線に形成された砂州と考えられています。古墳時代後期には微高地上に集落が営まれ、もとは漁労も耕作も行いながら生活し、社会の統治機構が発展する中で、古代を境として農村としての性格を強めた様子がうかがえます。

柴又は、古くは「嶋侯」と書き、奈良時代までさかのぼる古い地名です。「嶋」は海に浮かぶ「しま」ではなく、デルタ地帯に形成された土地の高まりをあらわし、「侯」とは河川が合流分岐する場所を意味しています。

〔太日川と国分道〕

葛飾柴又は、律令制による国家体制下では下総国葛飾郡大嶋郷に属していました（正倉院文書「養老五年下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」）。大嶋郷を構成する三里のうち葛飾柴又は嶋侯里の比定地とされています。古くは、江戸川は太日川（大井川）と呼ばれていました。下総国葛飾郡は、太日川の両岸にまたがる南北に長い広大な郡域を有しており、大嶋郷は太日川右岸の臨海部に位置していました。

葛飾柴又の江戸川対岸には、標高20mほどの下総台地の断崖が江戸川に沿って南北に伸びています。この台地上には下総国府や国分寺が置かれていました。葛飾柴又の微高地を東西に通る「国分道」は、この下総国府や国分寺に通じる重要な道でした。現在も沿道には柴又の鎮守「八幡神社」や大同年間（806～810）創建と伝わる「真勝院」が境内を開きます。国分道沿いの微高地には、古墳時代から奈良・平安時代の古代の遺跡が確認されており、古くから開発されていたことがわかります。

国分道が太日川に突き当たる辺りは、「がらめきの瀬」という浅瀬で、濁水期の干潮時には歩いて川を渡ることができました。葛飾柴又は、太日川の渡河地点で、古代から交通の要衝として発展してきました。



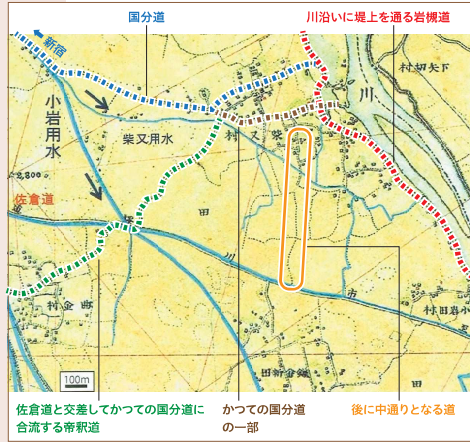
国分道に面する柴又八幡神社

近世の交通ネットワークと柴又村

〔江戸川の誕生と武蔵国への編入〕

近世初頭の治水工事により、東京湾に注いでいた利根川の流れは千葉県銚子で太平洋に注ぐように東へと移されました。太日川の上流部も新たに開削され、現在の江戸川の流れとなります。武蔵国と下総国の境が隅田川から江戸川となり、葛飾柴又は武蔵国に属することになりました。

江戸川を使って東北や関東の上流域から物資が江戸へ運ばれるようになります。柴又の渡河地点には、近郷住人のための渡船場が設けられます。現在も「矢切の渡し」として引き継がれ、観光用に運航されています。



渡船場につながる近世の主要な道（明治13年迅速測図をもとに作図）

〔近世の葛飾柴又と経栄山題経寺の創建〕



帝釈天（経栄山題経寺）

近世になると、柴又は大都市江戸の後背地として位置付けられ、柴又村は、船で江戸市中から下肥を購入して野菜を生産するなど農業を主体とする生業が行われていました。寛永6年（1629）には、国分道沿いに帝釈天が創建されます。正式名称を経栄山題経寺と号する日蓮宗寺院です。

近世後期から昭和期にかけての発展

帝釈天題経寺参道の発展と鉄道の敷設

〔庚申信仰の流行と柴又帝釈天〕

安永8年（1779）所在不明だった板本尊が発見されたのが契機になって、経栄山題経寺は江戸市中の人々や近隣の信仰を集めるようになり、庚申信仰の流行とも相まって参詣客を集め、帝釈天や帝釈天題経寺の通称で知られるようになります。

明治20年代から大正期、昭和期にかけては伽藍が整備され、華やかな彫刻を持つ堂舎で境内が飾られていきました。

葛飾区新宿や立石から柴又に通じる道は、帝釈天詣での隆盛に伴い、帝釈天題経寺へ誘う「帝釈道」と呼ばれるようになります。18世紀末頃に帝釈天題経寺参道が整備され、参詣客の増加に伴い農家が副業的に店を出し、これが常設化しながら門前町の様相を濃くしていきました。起点には、嘉永2年（1849）に「帝釈天安置の碑」が江戸市中の人々によって建立されています。

柴又用水の開削と農地の拡大

〔農業の営みと柴又用水〕

帝釈天題経寺参道の発展は、周辺の農地の開発と大きく関係しています。農家が屋敷を構え、周辺に畠、微高地の周りの低湿地には水田が広がっていました。今でも農村の面影を残す「旧家」の広い屋敷地が点在して残ることも葛飾柴又の大きな魅力であり特徴です。生垣や門を備えた屋敷構えや、主屋の形式や間取り、井戸や祠等にかつての農家の生活や生業が伺えます。

柴又南部の低地に耕地が広がったのは、近世後半に行われた「柴又用水」の開削を契機とします。柴又八幡神社内の文政9年（1826）



埋め立てられ歩道となった柴又用水

の「柴又勸農事績碑」や明治6年（1873）の「柴又用水の碑」等によれば、柴又用水は天保6年（1835）に開削されたもので、この頃の柴又村は相次ぐ飢饉や洪水、天災で農民の

〔鉄道の敷設〕

もともと柴又八幡神社の門前は葛飾柴又の中心ともいえる場所で、明治32年（1899）には柴又八幡神社の東側に帝釈人車鉄道の駅が設けられます。その後、大正元年（1912）には、京成電気軌道（現在の京成電鉄）の駅として「柴又駅」（昭和62年改修）が開業し、「柴又駅前広場」（令和3年改修）と共に葛飾柴又の玄関口となって現在に至っています。

このようにして、戦前までには、柴又駅と帝釈天題経寺二天門の間に帝釈天題経寺参道の両側の街区が発展し、現在に通じるまち並みが形成されました。



帝釈人車鉄道 柴又停車場から帝釈天を望む

生活は困窮を極め、名主達が質素倹約や勸農を働きかけ、荒地地改良を進める等して村の復興に努めていたとされます。

柴又用水は小岩用水から取水しましたが、その水源である小合溜井（現在の都立水元公園）の水が不足し、江戸川からも水を引き入れるようになりました。その取水口は、元は舟運のために設けられた入樋でした。大正期の江戸川改修事業後、昭和10年には新たな水路が設けられ、「新八水路」と呼ばれて現在にその跡を残します。

〔農地の拡大と中通り〕

柴又用水は、国分道の南側、微高地の裾に沿って北西から南東に向かって敷かれた本流と、これから分岐する支流で構成されていました。支流に沿って水田が開拓され、葛飾柴又は江戸・東京という大消費地を支える農村地帯として発展しました。

既存の農地と新規開拓地の境界となり、柴又と佐倉道を連絡する道となったのが南北方向の「中通り」です。この通りにも旧家の屋敷地が残ります。「帝釈天題経寺墓苑」、関東大震災で伽藍を焼失した「宝生院」が昭和2年に境内を移しました。北総鉄道の新柴又駅が平成3年に開業されることに伴い、中通りは新柴又駅を起点とする道となりました。

柴又の近代化と低地の開発

〔都市地域の拡大〕

葛飾柴又の人口・戸数は、正保3年（1646）には209人・49戸であったところ、明治元年には509人・100戸、大正9年には920人・155戸、昭和10年には2,073人・624戸、昭和25年には6,649人・1,541戸と、特に大正期の終わり頃から飛躍的に増え、戦後はさらに増加します。鉄道の発達、大正12年（1923）の関東大震災後や昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲後の転入等に伴う人口動態の中で、葛飾柴又の農地は住宅地へと転じ、景観も変わっていきました。

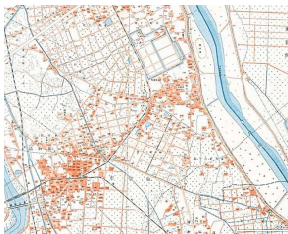
大正15年（昭和元年）には「金町浄水場」が設けられて、南葛飾、南足立、北豊島3郡の12町村を給水区域に給水が開始されました。江戸川に建つレンガ造の「取水塔」（昭和16年及び昭和39年建築）は、東京東部のランドマークの一つとなっています。

金町浄水場の南側の道路を挟んだ住宅地の一角に「水神様」が祀

られています。これは、戦前・戦後の浄水場拡張工事等の開発に伴い移築されたもので、現在も毎年11月3日に帝釈天題経寺の御神水と一緒に祭礼が行われています。いにしえからの葛飾柴又と水とのかかわりを今に伝えています。

〔耕地整理事業と宅地化〕

葛飾柴又では、大正末期から昭和初期にかけて耕地整理事業が実施され、農業の生産性が大きく向上しましたが、高度経済成長期になると農地は宅地化していきます。現在見られる宅地の建ち並ぶ風景の基盤は、耕地だった土地の記憶が継承されているのです。

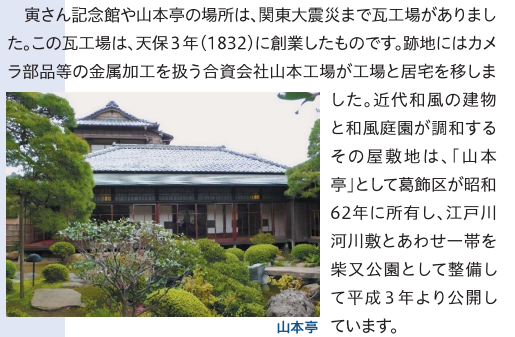


昭和戦前期（昭和3～14年）地形図

時代ごとの賑わいの創出

〔時代の変化の中で生まれてきた名所〕

近代以降、葛飾柴又には、幾つかの大きな景観の変化がありました。明治30年金町駅開業、明治32年に帝釈人車鉄道、大正元年の京成電気軌道の敷設、江戸川改修に伴う建物の堤外から堤内への移設、耕地整理事業（大正期から昭和前期）金町浄水場の竣工（大正15年）等です。このような中で、周辺では灌漑用水が工業用水としても用いられるようになり、明治期から大正期にかけて染織工場や化学工場、機械工場等が建ち始める一方、葛飾柴又では、農地の多くが住宅地に転じていきました。



山本亭

〔新たな魅力の創出〕

昭和44年に映画『男はつらいよ』の第1作が公開されシリーズ化すると、寅さん人気の高まりは帝釈天題経寺参道に観光客の増加をもたらしました。柴又帝釈天参道商店街神明会（以下、「神明会」という）は、昭和63年に自主協定として「帝釈天及び参道の景観保全に関わる指

導基準」を作成しました。また、これを契機として帝釈天題経寺参道の電線の地中化を図り、参道の舗装を御影石敷きに改修すると共に、葛飾区では、地元の要望に基づき和風修景した「公衆便所」を平成元年に建設しました。神明会では、平成元年を「柴又ルネサンス元年」とし、盛大にイベントを開催し寅さんの故郷柴又をPRしました。

映画『男はつらいよ』が平成7年でシリーズを完結し、観光客数が落ち込む傾向を見せ始める中で、葛飾柴又では寅さんの余韻を残しつつ、新たな魅力を創出するための様々な取組が官民を挙げて行われてきました。神明会では募金を集めて平成11年に柴又駅前広場にフーテンの真像を設置しています。

平成9年には江戸川河川敷及びその周辺の柴又公園の整備の一環としてレンタサイクルや地域災害活動拠点の役割を兼ね備える葛飾区観光文化センターが開設され、一部は「葛飾柴又寅さん記念館」となっています。帝釈天題経寺参道の起点には、寅さんを演じた渥美清さん奇進の「常夜燈」及び山田洋次監督の揮毫による「映画の碑」が建てられています。

平成10年代からは、景観誘導と一体となった新たな観光まちづくりが推進されています。この背景には、周囲と調和しない規模や意匠・色彩による建築が目立ち始め、参道沿いにもマンション建設が計画



映画の碑

葛飾柴又らしさ

〔都市と田園〕

葛飾柴又では、渡河地点に向かって微高地に道が通され、その沿道に農村が形成され、その中に信仰を軸とする町筋が発展してきました。また、その北部及び南部には農地から転じた市街地が広がります。

「葛飾柴又らしさ」の一つは、川が近く、柴又八幡神社を歴史の起点とし、帝釈天とその参道を発展のシンボルとしながら、その周辺に農村を由来とする緑豊かな低層の住環境が広がることにあり、江戸川土手から見る葦の景色、青空の広さ、空気の良さにも繋がっています。



江戸川上空から柴又のまちを俯瞰（平成30年ドローンで撮影）

このような「葛飾柴又らしさ」を表すものとしては、第1のリング、第2のリング、第3のリングとしてのそれぞれの景観のまとまりや、時代ごとの発展を伝える重要な構成要素等が挙げられます。

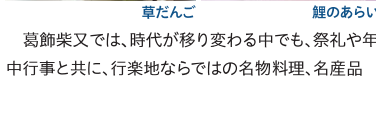
〔伝統の継承〕



柴又八幡神社の神獅子



草だんご



鯉のあらい

葛飾柴又では、時代が移り変わる中でも、祭礼や年中行事と共に、行楽地ならではの名物料理、名産品

これまでとこれからの取り組み

〔重要文化的景観選定後の観光振興〕



プロジェクションマッピング（帝釈天題経寺本堂）

葛飾柴又AR謎解きラリー

葛飾区では、重要文化的景観選定後、葛飾柴又の魅力を紹介・PRするガイドマップやパンフレット、動画を制作すると共に、「「葛飾柴又」重要文化的景観イベント実行委員会」を組織し、『文化観光』の振興に向けた取組を行っています。

〔今後の整備活用に向けた取り組み〕

区民と行政が一体となった葛飾柴又の文化的景観の保存・活用を推進するため、葛飾区では令和4年度から10年間を計画期間とする『国選定重要文化的景観 葛飾柴又の文化的景観整備計画』を策定しました。本整備計画では、多くの区民が郷土葛飾の歴史・文化への理解や愛着が深められるよう、整備活用の具体的な施策をまとめています。



されるようになるなど景観保全に対する危機感がありました。

帝釈天題経寺参道は、平成16年に東京都の「東京のしゃれた街並みづくり推進条例」に基づく「街並み景観重点地区」に指定され、前述の自主協定は「柴又まちなみ景観ガイドライン」として平成20年2月20日付で東京都によって告示されました（東京都告示第170号）。平成19年にはこの運用主体としてNPO法人柴又まちなみ協議会が設立されています。

このような取組が評価され、平成21年には「葛飾柴又帝釈天参道周辺のまちなみ」が、公益財団法人日本デザイン振興会の「グッドデザイン賞」を受賞しています。平成24年、山田洋次監督作品の魅力を伝える「山田洋次ミュージアム」を観光文化センター内に開設し、平成30年には柴又駅前広場に「さくら像」が設置されました。

〔文化的景観の中核を成す特質〕

このように葛飾柴又では、江戸・東京とのかかわりのなかで信仰や行業に人々が訪れ、帝釈天題経寺門前を中核とする賑わいを高め、時代ごとの名所を増やし、その利益を地域で享受してきました。また、このことが葛飾柴又らしさを守り、育てる住民の意欲を支えてきました。この歴史風土に根付いた



店舗が軒を連ねる帝釈天題経寺参道

地域振興と環境保全の循環こそが、「葛飾柴又の文化的景観」の中核をなす特質なのです。

のような文化が発展し、人々に受け継がれてきました。

このような文化は、また、地域社会の縦の繋がりと横の繋がりを保ち、地域内流通を支え、顔が見える生産活動を促し、地域を支える次世代を育ててきました。

地域の内外が共に認める「葛飾柴又らしさ」は、人情や下町情緒という言葉が似合うまちという点にありますが、地域文化が介在する人と人との交流と言い換えることもできます。

このような「葛飾柴又らしさ」を表すものには、柴又八幡神社等の祭礼や年中行事、川魚料理や草だんご、煎餅、漬物等の地場産品を用いた特産品、弾き猿といった郷土玩具等が挙げられます。

〔内と外の文化交流〕

水陸交通の結節点として栄えた葛飾柴又は、外の文化の影響を様々な受け、積極的に取り入れてきました。

「葛飾柴又らしさ」の一つは、地域内で互いに気遣い合いながらも、細部では外の文化、新しい文化を積極的に捉える気風にあります。このような「葛飾柴又らしさ」を表すものとしては、日光東照宮（栃木県日光市）や歓喜院聖天堂（埼玉県熊谷市）の関東の内陸部の寺社彫刻と、南房総地域の寺社彫刻の影響がうかがえる帝釈天題経寺



帝釈天題経寺の彫刻

の堂舎の彫刻、松戸から曳家されたと伝わる帝釈天参道の店舗、下総の農家の特徴がうかがえる帝釈天参道の店舗、旧家の生垣に用いられるイヌマキ等が挙げられます。

〔葛飾柴又らしさの象徴的な場〕

「都市と田園」「伝統の継承」「内と外の文化交流」という葛飾柴又らしさを伝える最も象徴的なものは帝釈天題経寺とその参道のまち並みです。明治から大正・昭和にかけての伝統形式を引き継ぐ木造店舗の多くは農家を起源とし、現在でもそこで住まいながら製造と販売をしているところもあります。伝統的な名物・名産や対面販売、来訪者との交流等、葛飾柴又らしさのすべてを目に見える形で今に伝えています。